

りぼん 通信

平成 25 年 6 月 12 日発行 第 2 号

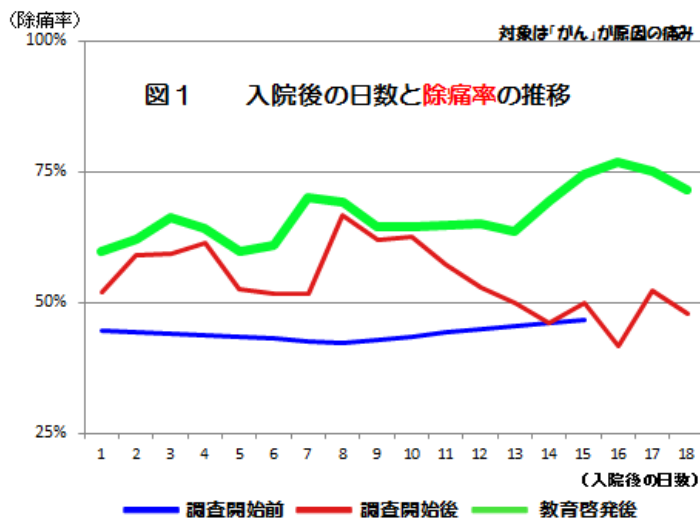
■ 当院で行われていたがん臨床研究事業※の報告会が開催されました！

平成 25 年 4 月 17 日に※「がん疼痛治療の施設成績を評価する指標の妥当性を検証する研究」(略称：SPARCS) の報告会が開催されました。

本研究は平成 24 年 2 月 15 日から平成 25 年 3 月 22 日までに当院に入院されたがん患者さん(がんの既往歴がある患者を含む)延 3097 人を対象に「痛みがどれくらい適切に取れているのか」、「痛みが取れると患者さんの生活の質がどれくらい良くなるのか」などの調査を行ってきました。本調査にはたくさんの患者さんにご協力いただき誠にありがとうございました。調査開始から約 1 年間で分かったことについてお知らせいたします。

■ 研究開始から 1 年—これまでの調査でわかったこと

調査後半(10 月)からは、外部指導医により、医師や看護師への疼痛治療に関する教育も行われました。その結果、医療用麻薬の適正な利用が進んだことによって、痛みがとれた患者さんの割合 = 除痛率が向上しました。



また図 1 のように、調査開始前の入院時の除痛率は 50% をきっていましたが、調査開始後は 50% を超え、さらに、教育啓発後は高い時点で 75% を超え、痛みが緩和された患者さんが増えたということがわかりました。

15 日目以降の除痛率は、調査開始後も改善が見られませんでした。教育啓発後は改善され、75% 前後をキープしていることがわかりました。

このことから、継続して痛みを測定することと、医師・看護師の疼痛治療に対する知識・技能を深めることが、疼痛治療の成績を改善するということがわかりました。

「聴かせて下さい、あなたの痛み。」

当院ではこれからも患者さんの痛みを耳を傾け、今後は痛みを評価するだけでなく、評価した結果を診療に役立てるシステムをつくり、患者さんの痛みの緩和・治療に真摯に取り組んで参りますので、ご理解・ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

